

家族間のコミュニケーションを改善する食器具研究

-日常生活における行動習慣に基づいて-

A Study of Eating Utensils for Improving Communication between Family Members

- Based on the Habits and Behaviors in Daily Life -

■ 郭 菽桐 Xitong GUO

愛知県立芸術大学大学院 望月未来研究室

Aichi University of the Arts

■ キーワード：核家族、非言語的コミュニケーション、行動習慣、礼儀作法

はじめに

核家族とは、社会における家族の形態の一つである。日本及び中国の一世帯当たりの人数は縮小しており、「父親または母親と子供」という二世帯のみ同居する家族が多くなってきた。しかし、核家族や共働き家族の増加などにより、生活時間帯のずれ違いが生まれ、コミュニケーションの機会も減り、世代間コミュニケーション・ギャップの問題が起きている。

本研究は、家族間のコミュニケーションの問題について、家族の日常生活においてよく使う茶碗、お箸などの食器具の使用習慣から改善を検討する。まず、使う行動習慣及び食事マナーを考察して、製品の造形やデザインなどの要素からコミュニケーションの雰囲気改善できる行為を再考する。その上で、非言語的コミュニケーションの意識が強くなるプロダクトデザインの提案を行っていく。

1. 研究背景

1.1.核家族化

19世紀後半から、アジアを含めて世界中で工業化と都市化が進んできた。生産技術の革新により、社会の構造も変容している。

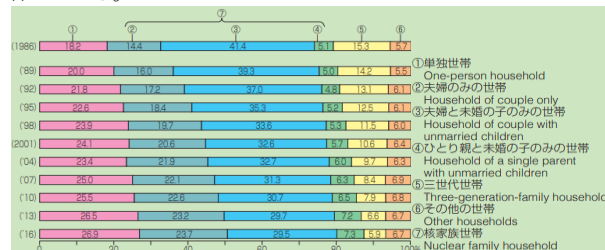


図1 世帯構造別にみた世帯数の構成割合の年次推移

出典：厚生労働省政策統括官(統計・情報政策担当)「国民生活基礎調査(平成28年)の結果から

グラフでみる世帯の状況」平成30年度

工業化による社会では、機械の生産力が人力に代わって

いる。都市化が一定の段階に発展すると、公共機関や福祉でさまざまなサービスが提供されるので、集団でも個人でも都市でうまく暮らせるようになる。流通業や飲食業等のサービス産業の進展や、女性の職業意識の高まり等により、女性雇用者が増加してきた。この頃から、人々は自然に子どもを育てることの費用やメリット・デメリットを気にし始めるようになってくる。

1.2.更年期と思春期の重なり

人間は年齢によって異なる量のホルモンを分泌している。「少子化社会対策白書」(2018年)の中で、1995年から女性の初産年齢は遅くなっていく。この現象と身体機能によって、親の更年期と子供の思春期が重なることになる。この二つの時期では分泌するホルモンは優位になる交感神経に働き、双方の情緒を不安定にさせてしまう。よって、この時期の親子関係は、世代間の様々な問題を生み出しやすくなるのだ。

1.3.共に食事する機会の減少

近年、夫婦二人共働き家庭が増えており、親と子供の生活スタイルが異なるため、家庭メンバーの食事の時間帯が噛み合わない。毎日の朝食と夕食は、このような状況において家族の貴重なコミュニケーションの機会である。本研究はデザインを通じて、「家族と一緒に食べる」ことの重要性を追求していく。

食事をする時は、家族とコミュニケーションがしやすい。さらに、コミュニケーションの雰囲気も大切である。コミュニケーションを誘起される行為習慣から道具の形を検討している。

2. 非言語的コミュニケーションのデザイン化

人は意識的、無意識的に非言語的コミュニケーションを使

用する。深澤直人は「行為に溶けるデザイン (Design dissolving in behavior)」を考えて、デザインが人の無意識に関わっていることを述べている。非言語的コミュニケーションを手段として、家族と一緒に食べる行動習慣—「共食」で家族間コミュニケーションを改善する製品デザインを考える。

3. 礼儀作法—「家族との儀式感」

感情の表現やコミュニケーションの促進を考える際、非言語的な文化と行為は重要な切り口となる。古来から現在まで続く礼儀作法は、敬意や愛情を表すものであり、時間や場所などの場合に応じて、言語・非言語的な行為及び表出されたものである。これらをあわせた礼儀作法は、主として社会の秩序や人間関係を構築し維持する価値基準、および行動様式の意味で用いられる。すなわち、伝統文化による礼儀作法は、人と人、人とモノとの関係を繋げているのである。

また、礼儀作法はある種の儀式的な力を持って、自分の本当の気持ちをより完全に伝えることができる。「三つ子の魂百まで」ということわざから考え、日常生活における行為は大切である。現代社会における家庭構成や時間帯の現状から見て、食育は一つの重要な部分になるはずだ。食事の場で親子の間で礼儀作法や習俗などへの理解を増やすことで、コミュニケーションの質をあげることを目指す。

そのため、非言語的な礼儀作法の視点から、家族の共食活動に対して、コミュニケーションしやすく、軽快な雰囲気をうみだすために、食事の過程で使う道具を検討していく。

4. 食事の非言語的コミュニケーション

4.1. 手の動作

道具を使う時に、手の動作は欠かせないものである(図 2)。言語・非言語的コミュニケーションにおいて、手の動作(ジェスチャーなど)は社交性がある「記号」と言われている。特に片手よりも両手は丁寧で、文化的な意味を持っている点に注目した。

非言語的コミュニケーションは、両手の動作と道具の使用感を通じて、家族間の感情を繋げることができる。親と子供の間に、礼儀作法を用いて繋がりを生み出す。礼儀作法と道具の使用習慣から共通点を探し、伝統文化の道具を使う時の習慣及び相手とコミュニケーションする時に、共感を起こす。



図 2 茶碗と持つ行動習慣の分析(一部)

4.2. 食器具についての検討方法

非言語的コミュニケーションを促すデザインによって、家族間の穏やかなやりとり(感情と行為)を発生させる。丁寧な行為は、隔たりを埋めて、会話しやすい雰囲気を作りだす。この無意識的な行動習慣と食器具の形、部分の役割と関係を検討している。日常生活でよく使う茶碗だけではなく、東洋文化での箸などは、行動習慣によって食事の質に影響できるかど

うか考察していく。

市販のサンプルをもとに、形、高さ及び直径などの要素を比較して、片手或いは両手で使いやすい、または使いにくい種類に対して図表を作成し、図表から理想的なサイズと形を探す。3D プリントした形をもとにモデルを作ってみる。何人かのユーザーのサンプルを使って、図表を練り直し、実験の結果を見る(図 3)。

この結果によって、サンプルのサイズと形に考えた通り改善点をまとめる。改善したサンプル再度を実験し、結果によって新しいモデルを作っていく(図 4)。

cm	○	▽	片×両○ 片・両△	▽	○	▽	片×両○ 片・両△
10.5	4		x	30°	12	4	x
	6		x			6	x
	7.5		x			6	x
12	4		x	30°	14	4	○
	6		x			6	△
	7.5		x			6	△
13.5	4		△	30°	16	4	△
	6		△			6	△
	7.5		△			6	△
14	4		○	30°	18	4	△
	6		○			6	△
	7.5		○			6	x

図 3 サンプルの検証(一部)



図 4 モデルと検証(一部)

おわりに

2021年度は研究背景により、問題点を着目し、リサーチ及び提案を出した。また、核家族化、非言語的コミュニケーションのリサーチに基づき、仮説の発想及び実験を行った。今後は異なる角度からプロダクト研究を通して、家庭や社会における人間関係と世代間コミュニケーションの問題を明らかにできる。家族間のコミュニケーションを促進することを目標として、プロダクトの新しい提案をして行う。

注、引用

- 1) 内閣府「平成 16 年版 少子化社会白書(全体版)」
- 2) 内閣府「平成 30 年度版 少子化社会対策白書」2018 年 6 月
- 3) 「Design シンポジウムで発表した論文」2019 年度
- 4) 日本百科大全书(ニッポニカ)「礼儀作法」の解説

参考文献

- ・ 佐藤悦子『家族内コミュニケーション』勁草書房 1986 年
- ・ 正岡さち・飯塚智子「世代間コミュニケーションとしての家族の団らんに関する研究」『島根大学教育学部紀要』第 42 巻別冊 2009 年
- ・ 深澤直人『デザインの輪郭』TOTO 出版 2005 年 12 月 1 日